2006 旬

まず、あるべき姿を目指し

色白でキリッとしたマスク。明るく明せきなしゃべり、ホープさんらしい精かんな表情である。十七日が三十歳の誕生日。

明治維新後、福山藩（広島県）藩士だった大島七太郎が十四世喜多六平太能心宗家に師事、帰後（同県東部）に能楽を普及させてから輝久で五代目。父親の政允がいまも自前の福山大島能楽堂で活躍している。

姉・衣恵は喜多流で初めての能楽協会の女性会員。妹の文恵、紀恵も地元で能楽普及につとめている能楽一家だ。

「いつか帰ることになるかもしれないけど、父もまだ六十三歳。それでも能会などで一カ月に一回は福山に行ってます」

しかし、能の修業は、さまざまな舞台が圧倒的に多い東京。父親も若いころは、ずっと東京だった。

高校を卒業して大学進学のため上京して、喜多流宗家に入門。塩津哲生に師事、いまは週四回、喜多六平太記念能楽堂（東京・上大崎）に通っている。

それまで、物心つく時から、一昨年二月に他界した祖父の久見に鍛えられた。名前の一字ももらい、顔つきや動作も祖父にそっくりという。

「個性を出すというより、あるべき姿に自分の体を鍛え、理想とされる基本的な所作、姿勢に近づけること」と〝駆け出し〟を強調するが、周囲の評判はメッポウいい。「まだ修業課程だから、やりたいものも三年周期で変わるし…」

新しい年、喜多流青年能で三月二十五日に「弓八幡」のツレ、九月二十三日に「知章」のシテが予定されている。

「いつか福山に帰ることになるかもしれないが、東京で修業を」と語る大島輝久＝東京・上大崎の喜多能楽堂で

能楽師 シテ方喜多流 大島輝久

おおしま・てるひさ　1976年、広島県福山市生まれ。国学院大中退。祖父・久見、父・政允に師事、94年上京して喜多流内弟子入門。89年大島家三代能の「箙」で初シテ。2003年「猩々乱」を披く。